

長い20世紀の終焉

中山 智香子

(東京外国語大学教授)

序

2014年が暮れ、2015年が始まるこの時期、振り返れば世界は数々の災厄や難局に直面し、大きく揺れ続けている。予期できなかった災厄もあるが、一見自然災害とみえながら精査してみると、人間社会が対応を怠ってきたために起きた人災であると言わざるを得ないものもあり、対応が遅れてさらに災厄が拡大した場合もある。ところで、そうした際になぜか「経済」と呼ばれる領域が災厄を悪化させる側に加担していると、多くの人びとが漠然と感じているのではないか。すなわち、「経済」は何らかのコスト（犠牲）をとまなびながら進んでいくが、「経済」的繁栄のためには多少の犠牲（コスト）は仕方がないと。そう考えるとき人びとは、犠牲を強いられる側にみずからをもちろん含めていない。

このような考え方にはおそらく、新自由主義的な思想が関わっている。それは世界そして日本の体験した20世紀の激動のなかで生み出され、今なお残っているものだ。世紀の転換から15年が経過しようという現在、高齢化が加速する世界的な動向の中で、かつての思考のしかたが再生産され残存する可能性は、なおも増大するのだろうか。最新のデータによると、たとえば日本の人口の9割近くは20世紀生まれ、21世紀生まれの年少人口（0歳から14歳まで）の占める比率はわずか12.8%、出生率は1.43でここ40年間ほど連続して2.00を下回っているという事実である¹。とはいえ、人口構成と思考様式が必ずしも連動するとは

限らないだろう。これから育ってくる世代が異なる思考の担い手となるなら、未来は拓けるはずだ。本稿は「長い20世紀の終焉」を考察し、次なる一歩のための手がかりを模索する。

「長い20世紀」とは何か

20世紀終わり近くの1994年に、「長い20世紀」をタイトルとする書籍を刊行したのは、イタリア出自の経済学者ジョヴァンニ・アリギであった²。かれが分析を進めた「長い20世紀」とは、19世紀の終わりから20世紀の初めにかけて、世界の覇権を握っていたイギリスが次第にその地位をアメリカに奪われ、次に覇権を手にしたアメリカがとりわけ1950年代、60年代には物質的拡大を進めたものの、その後の金融市場の拡大によって新しい覇権体制を展開するに至った1970年代以降の状況までを指すものであった。アリギは、その特徴や盛衰を理解するためにはさらに何世紀かをさかのぼり、イギリスの覇権に至る以前のイタリア都市国家ジェノヴァやオランダの覇権と比較することが有用であるとした。これらの何百年かの前段階を前史とした上での「アメリカの世紀」が「長い20世紀」である。1994年当時、その終焉がいつどのようなものになるのか、まだはっきりと見えていなかった。

一方、おなじ1994年に『極端な時代』を刊行したイギリスの歴史家エリック・ホブズボームは副題に「短い20世紀」を掲げ³、1914

年から1991年という時期を枠取りした。この「短い20世紀」のうち、第一次世界大戦勃発の1914年から1945年までを破局の時代、1945年から1970年代ぐらいまでを黄金時代、その後から1991年すなわち冷戦時代の終わりまでを地すべりの時代と三分したのである。はじめの二つの区分は「長い20世紀」の区分にほぼ対応するが、一つめの区分のはじまりを1914年と設定することで、アメリカの覇権の台頭により強く焦点をあてた。しかしさらに重要なのは、最後のひとつの区分によって、対抗軸の崩壊とともにひとつの時代が終わったという見立てを行ったことである。

ここで二つの分析の詳細や論争に立ち入る余裕はない。しかし、繰り返しになるが、両者の見立てから20年が経過したにもかかわらず、世界はどこか今も20世紀の延長上にあるように思われるのだ。わたしたちは「短い20世紀」終焉の、つまりは冷戦構造崩壊の意味を、まだ十分にとらえきれずにいる。またそれは、わたしたちが社会的なものや共有地（コモンズ）などについて、あるいは広義の理念としての社会主義について考える際の障害になっている。この点について、アリギがその後「長い20世紀」の行方を追って2007年に刊行した『北京のアダム・スミス』も援用しながら考えてみよう。

一国的覇権の限界

アリギによれば、これまで世界システムの覇権を握った諸国の内実は、覇権の前半と後半で資本蓄積の異なる位相をもった点で共通していた。いずれの覇権国も、まず実物、物質的拡大によって世界支配を行ったが、やがて行き詰まり、予兆的危機と呼ばれる危機に陥った。するとかれらはいずれも次に金融部門での支配の実権を握り、しばらく地位を保ったものの、これが危機に陥るといよいよ覇権の終わりの段階を迎え（これを終末的危機という）、その頃までに潜在的に勢力を伸長させてきたものとの衝突が生じて、ついに覇権の交代が行われた。もちろん緩やかに妥当する大枠の図式以上のものではないが、アリギはそこに、貨幣から商品へ、そして再び商

品から貨幣へという蓄積サイクルの循環と拡大を見出した。

この図式にしたがうなら、1970年代から80年代にかけて顕在化した新自由主義の時代は、覇権国アメリカが金融化によって予兆的危機から脱出した、覇権の後半期にあたる。そして世界は現在に至るまで、次なる終末的危機の時期がすでにきているのかどうか、次の覇権国が出現しているのか、中国がそれにあたるのか、はっきりとわからない混迷状態にある。しかしアリギは、こうした蓄積サイクル自体がもはや限界に到達しており、次はないのだという見方を示した。かれは盟友アンドレ・グンダー・フランクの『リオリエント』⁴を、つまり世界は西洋中心主義の時代から「オリエント」すなわち東による支配の時代へと、再方向づけ（リ＝オリエント）されるという視点を引き継ぎつつも、重点をシフトさせた。中国が台頭したとしてもアメリカの代わりの役割を果たすことはない。しかし「東」としてではなくむしろ「南」として、いわゆるグローバル・サウス⁵の一端から出現した勢力として、世界の勢力バランスを変える役割を果たすという見方を示したのである。アリギにおける「長い20世紀の終焉」は、先進国による一国的覇権の終焉であった。

それは、アメリカが植民地をもたず、少なくとも名目上、制度上は独立諸国と「対等な」関係を結んでいるものの、実質的には世界各地に軍事基地を置き、安上がりな統治と保護の見返り（みかじめ料）を獲得するやり方で、グローバルな帝国を築こうとした夢の挫折であった。かつてイギリスは、グローバル・サウスの一部であるインドとの関係、とりわけ貿易赤字の調整と兵士の動員によって覇権を大いに支えたが、アメリカは別のやり方をしなければならなかった。のみならず、ヴェトナム、そしてイラクでの戦いに見られるように、「強制的な手段を通じて…問題を克服しようとするアメリカの試みは、逆効果となり、グローバル・サウスの人びとの社会的・経済的な力の増大にとって、前例のない好機を作り出し」⁶てしまったのだ。

第二世界の崩壊の意味

たしかにグローバル・サウスの諸力は、いろいろな意味で世界の勢力図を変えつつある。しかしその陰で、もう一つの「東」つまり第二世界の消失の意味を考えるという視点は置き去りにされてしまった。それは現代世界に暗い影を落としていると思われる。冷戦構造崩壊に際し「西」側世界—日本を含む—は、「自由世界へようこそ」という歓迎ムード、すなわち全体主義的圧政に苦しんでいた人びとに対し両手を広げて迎え入れるという歓びに包まれたが、そこで見落としたことがあるからだ。

第二世界の解体は、「アメリカは軍事力によって達成できなかったこと—冷戦においてソ連を打ち負かし、反抗的な南を手なずけること—を、金融的手段で達成できた」⁷とアリギ自身も述べるとおり、金融化のさらなる世界展開を意味していた。N. クラインの「ショック・ドクトリン」を引用するまでもなく、「自由」の名の下に旧東側世界に課されたのは、強制的な市場開放と市場経済への急激な移行であった。第二世界は第三世界のより貧しい一部分となった。かれらもまた、みずからのしがらみを元手として、なにがしかの資本所有者となり、日々の株価の変動を気にかけて金融レントを稼ぐことを求められるようになった。その結果、一部の富裕層を除き第二世界のかなりの部分は、第三世界以上に貧困化した。

しかしそれだけではない。第二世界の諸国が解体されたことで、それに関わる考え方のすべてが否定されなければならないかのような流れができた。社会主義は失敗したのだから社会（主義）「的なもの」はすべてが誤りであるという、片側の実質を欠いた冷戦的思考が継続したのである。この思考様式は、社会的なものや再分配を考えること自体が他人任せの怠慢に陥るとしてこれらを否定し、自分のことは自分でという自己完結、自己責任の立場をとる。それはみずからを人的資本として活用するため自己実現の理念にも適うかに見え、人びとを魅了した。統治する側にとっては、安上がりで都合な考え方であった。

失敗した者へのセーフティネットをやすやすと外すことができたからである。

しかもこの思考様式は、単に前向きなのではなく、「社会」的なものを負担と見て憎悪するという、特異な感情を孕んでいた。なぜか。おそらくその一端に、解体した第二世界が実は第一世界ととても似ていたという問題がある。肥大化し官僚的になった組織の下で、ノルマを達成するだけになって構成員のやる気が失せた状態は、産業の生み出す先端技術が主導権をふるうようになったことに起因していた。ガルブレイスがテクノストラクチュアと看破したこの構造は両超大国に共通し、これに連なる諸国も同じ価値観を共有していた。

覇権の後半に至って技術の重点が重化学から金融や情報部門に移り、組織の統合形態が系列企業などのより見えにくいものにも変わっても、テクノストラクチュアそのものは継続した。にもかかわらず第一世界はそれを「大きな政府」の「全体主義」的問題に収斂させ、第二世界とともに葬ったかのようにふるまったのである。憎悪はおそらく多分に、みずからに似てかつ制御できないかもしれないものに対する潜在的な恐怖感から生まれている。

さらにいえば、たとえば冷戦時代に独自の社会主義路線を進めてきた旧ユーゴスラヴィアの分裂に見られるように、冷戦の対立構造から第三者的利益を得ていた諸国、諸勢力が、第一世界の標的にされるようになったことも、この憎悪と関わりをもつと思われる。アメリカの謳う「自由と民主化」にそぐわない体制や勢力、特にファシズム、独裁と名指されたものは、人道という大義の下で軍事攻撃を受けるようになった。「西」側諸国は、アンチ・ファシズム・ヒステリアと名づけるほかない取り乱し方で、あからさまな偏見をむき出しにしながら、比較にならないほどの小国を攻撃するようになったのである。

アリギが見通したとおり、このような攻撃によって覇権を保つ試みに持続力はなかった。それでも、攻撃を被ったグローバル・サウスの側には、相応の憎悪が醸成された。アリギのどこか楽観的な展望とは異なり、グロ

ーバル・サウスの台頭が決して平和的なものとはなりえないのは、無理ないことであった。

絶望を力に変える

世界システムの覇権国が無理を通して突き進んだ果ての現代世界は、もはや取り返しのつかない地点にまで到達しており、度重なる災禍や破局を前にしながら簡単に打つ手があるとは考えにくい。しかしそれでも現在の、あるいはこれからの破局後の世界にとって「長い20世紀」の経験は、その意味が考察され咀嚼されるならば、いくぶん役に立つかもしれない。かつての第二世界の崩壊は、その後の多くの災禍に先駆けて体験された破局の始まりであったともいえるからだ。投げ所にしてきた国の枠組みを失い、瓦礫のような現実に直面した人びとは、差しのべられた「自由」の手を握り返す前に、失われたものはなんだったのかと少し考える余地を与えられなければならないはずなのだ。たとえ金融化の力がすでに忍び寄っていたとしても、たとえ破局が敗北の結果であった一たいていの場合がそうであるが—としても、破局によって与えられた大きな仕切り直しの可能性を、転換点として生かす方法はあるはずだったのである。それは第二世界の過去においてだけでなく、世界各地の難局についてもいえることである。

日本には今もなお破局後の情景が広がっている。震災から四年が経とうとしているが、原発事故は終結せず被災地の復興が進んでいないばかりか、その後のさらなる災厄によって、新たな被災地が次々と生まれている。各自が自己責任で小金を稼ぎ出し、みずからの一生を終えるまで心配ないように投資したり貯め込んだりするだけでは、決して解決できない問題が山積している。国家の側も、金融化の尻尾にすぎり、貨幣の名目価値の増加で帳尻を合わせるだけでは、瓦礫を片付けることは決してできないのだ。もちろんおカネは重要であり、必要なところにはもっと十分に投入されなければならない。しかしさらに重要なのは、第二世界への憎悪とともに葬られた「社会」的なるものの理念を再認識し、

再分配の意味とはたらきを、あらためて確認し実践することであろう。わたしたちはそうして初めて「長い20世紀」を終焉させ、生まれ育つ世代にバトンを引き継ぐことができる。かれらがせめて少しの希望でも未来に見出すことができるように。

- 1 ここで示した「最新のデータ」とは、年少人口については総務省統計局の「人口推計」（平成26年11月）が示した平成26年6月の数値、出生率については厚生労働省が平成26年6月に示した平成25年人口動態（概数）からの数値である。
- 2 Arrighi, G. 1994, *The Long Twentieth Century: Money, Power, and the Origins of Our Times*, London/ New York, Verso. (土佐弘之監訳、柄谷利恵子、境井孝行、永田尚見訳『長い20世紀：資本、権力、そして現代の系譜』作品社、2009年) ジョヴァンニ・アリギ (1937- 2009) はミラノ (イタリア) 生。1970年前後からアントニオ・ネグリらとともにイタリアの労働運動に関わったが1979年に渡米し、I. ウォーラーステインらとともに世界システム論のおもな論者となって、精力的に世界システムの解明を行った。おもな著書に『反システム運動』(I. ウォーラーステイン、T. W. ホプキンスと共著、原著1989年)、『北京のアダム・スミス』(原著2007年) など。
- 3 Eric Hobsbawm, 1994, *The Age of Extremes: The Short Twentieth Century, 1914-1991*, London: Abacus. (河合秀和訳『20世紀の歴史：極端な時代上、下』、三省堂、1996年) ただし原著のその後の版では副題が変わっている。
- 4 A. G. Frank, 1998, *ReORIENT: Global Economy in the Asian Age*, Berkeley/ Los Angeles/ London: University of California Press. (山下範久訳『リオリエント：アジア時代のグローバル・エコノミー』藤原書店、2000年)
- 5 かつて世界の貧富の差を表すのに「南北問題」という表現が用いられたが、やがて赤道を境とした空間的区分よりも比喩的な意味を強めて、「グローバル・サウス (グローバルな南)」という表現が用いられるようになった。
- 6 Arrighi 2007, 邦140頁。
- 7 前掲書, 邦訳208頁。